

第2節 平安時代の粗製土師器碗について ―河内地域南半部の土師器碗の動向―

三宮昌弘

はじめに

今回の郡戸遺跡の調査において、(その2)調査区検出の平安時代集落で、掘立柱建物柱穴の柱抜き取り穴から出土した土器の中に、「粗製土師器碗」とか「南河内型杯」と呼称される土師器碗がいくつかあった。

建物や集落の時期に関する重要な遺物であるので、検討のために類例を収集してみたところ、藤井寺市域のはさみ山遺跡や北岡遺跡などで比較的多く出土している事が分かった。分布域は、類例の収集がまだ不十分ではあるが、石川流域だけでなく羽曳野丘陵西側の河内台地上にも見られ、今のところ、北端の出土遺跡は中河内の八尾市美園遺跡で、南端は羽曳野市の東阪田遺跡になると思われる。

しかし、それらの各報告書でこの土器に対して示される時期は、9世紀代から11世紀代まで、様々であり、各々の編年観にも齟齬の見られるものがしばしばあった。

南河内地域平安時代の土師器編年に関しては1989年に府教育委員会の「南河内遺跡群発掘調査概要Ⅱ」¹⁾で一瀬和夫が、1992年に大阪市文化財協会の「長原遺跡発掘調査報告Ⅴ」²⁾で佐藤隆が、1993年に藤井寺市教育委員会の「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅷ」³⁾で上田睦が、各々試みているが、対象とされた資料に地域的偏りがあり、全体的な整合性が十分に検討されたとは言いがたい。

そのため、それらの成果を参考にしつつ、全体的な消長の実態を検討しなおす必要にせまられた。ここでは、筆者の力量不足もあるため、粗製土師器碗に限って論を進め、他の土師器に関しては共伴関係などに限って必要な時にふれる程度としたい。

1. 粗製土師器碗の定義

現在までの各類例の報告では、杯とするものと碗とするものがある。土師器における碗・杯・皿の法量・形態による境目が崩壊していく時期のものであるので、分類上どちらでも良いとも言えるが、後述するように、この碗の祖形を平城宮編年の碗Cに求める立場と、全体的に、口径に比べ小さい底部という、碗の形態をとるものが多い事から、ここでは碗とする。

粗製土師器碗の「粗製」の定義としては、外面の調整において、口縁部に1条ヨコナデが入るより下は、成形時のユビオサエをそのまま残すものとする。図面上には現れにくいですが、実際この種のものは、ナデも粗雑であり、器形も歪みが見られるものが多く、精製の土師器とは一見して見分けが付きやすい。

高台の有無に関しては、無高台のものをA類、有高台のものをB類とするのが一般的なのでそれに従う。しかし、実態としては両者が形態・調整の面で共通する事が多く、系統的にはあまり重要な分類基準ではない。

身部の形態としては、大きく3種に分けられるので、それをa・b・c種とする。

a種は、調整はユビオサエを残しながら、形態としては平城宮編年の杯Bを模倣したような、断面形が直線的に逆「ハ」の字に開くものである。ただし、蓋は伴わない。

粗製碗の中では比較的に丁寧なつくりで、B類がほとんどでA類が少ない。

b種は、口縁のナデが強く、それにより外面に稜を成して屈曲するもので、その屈曲より上は、垂直

に近く立ち上がるか、外反するかである。A類が多いが、B類も一定量ある。

c種は、体部の立ち上がりから口縁までが丸く弯曲するもので、黒色土器碗と形態的に共通性の高いものである。A類は少なく、B類が多い。

2. b種の形態・調整と製作技法の復元

ここでは、藤井寺市域の調査で「南河内型杯」と呼ばれているb種を主に考えていきたいので、それについてもう少し詳しく見ていきたい。

底部は平底を成すのが一般的である。底部外面が平坦で無調整のものがあるので、台上で正置状態で製作されたのが分かる。B類では、底部中心が下がるものがあるが、高台より下に出るものはほとんどないので、製作時のへたりと思われる。A類で底部にまでユビオサエが認められるものは、凹気味の底部となる。

体部は丸く立ち上がり、ユビオサエを明瞭に残し外反気味である。まれに軽いナデが入るものもあるが、ユビオサエが完全に消える事はない。

ユビオサエは、無秩序に散在するものもあるが、この種に良く見られるのは、切り合って一列に並ぶもので、連続ユビオサエ列とも言うべきものである。それが斜めに入り外周を囲むのがb種の特徴的な調整である。ただし、図面上は、ユビナデ状に表現されていたり、特に意識することなく個々のユビオサエとして表現されているものも多い。

ユビオサエ列の方向は、右上がりが多いが、左上がりもある。また、列内のユビオサエの切り合いも、一定方向で下を上が切るものが多いが、まれに上を下が切るものもある。さらに、そういったユビオサエ列が配された後、その上にランダムにユビオサエが入るものもある。

口縁は下のユビオサエを切るヨコナデが1条入り、それにより屈曲する。外面はヨコナデ下端が稜を成す。そのナデにより口縁が外反するものと、直線的に上に向くものがある。外面のヨコナデは最後にナデ上げるものではなく、横方向のまま工具が停止した痕跡の確認できた例がある。また、ナデの下端ラインは直線的である。

内面は全面ナデで仕上げられているようだが、ナデ方向の分かるものはほとんどない。ただ、わずかに、底部と体部の境に方頭状の工具のアタリが残る例があり、少なくとも一度は、底部から体部にかけ、柔らかい板状の工具により斜めにナデ上げている事が知られる。

高台は全て貼り付けで、概して低いものである。断面形はほとんど三角形である。特に、高さ1mm前後の、高台として機能しているか疑問なほど矮小化しているものがあり、これを退化高台としておきたい。また、新しい時期のもので、貼り付けのユビオサエをそのまま残すものがあり、その例の中には断面逆台形のものも認められる。それらは粗製高台と呼びたい。

全体の形を見ると、歪みの認められるものがむしろ通常のような状況だが、その歪みも、自重によるへたりや、焼成時の歪みより、口縁が不規則に波打つなど、製作時の不整形な状態がそのまま残されたと考えられるものが多い。

以上、b種の調整・形態を詳しく見てきたが、そこから製作技法を考えてみる。

ユビオサエ列は、瓦器の放射状指頭圧痕と同系のものと言えるが、口縁部が屈曲する形態や、ユビオサエが施される部分がむしろ外反気味になる事、製作時の歪みなどから見ると、型押しによる製作は考えにくい。

底部から、台上で正置の形で作業が考えられ、口縁部のヨコナデから、轆轤の使用が考えられる。

また、ユビオサエを残す部分で、粘土接合痕が認められる例がなく。破断面にも見えない。ただし、底部と体部の境がきれいに割れる例があるので、その部分では接合されているようである。ケズリが認められないのに器壁は非常に薄いのが特徴である。

復元されうる製作過程は、まず、製作前に準備される粘土の形態は薄い板状のものと思われる。その時点で器壁の薄さを決定しているのであろう。轆轤上で、底部を円盤状に切りとり、そこに円錐台形状に巻いた板状粘土を接合して体部を形作るのであろう。その後、轆轤を断続的に回しながらユビオサエで形を整え、次にゆっくりとした回転で口縁部をナデる。この時点で、内面もユビオサエを消すようなナデが施されたであろう。そして、最後に、轆轤からはずして高台の貼り付けなど底部の調整を行ったと考えられる。

3. 粗製土師器碗の出自

佐藤隆は、粗製土師器碗の出自を、A類は平城宮編年の碗Aに、B類を杯Bに求めているが、A類とB類は、同時期的には常にB類の方が大きいという法量的な差はあるものの、高台以外の器形と製作技法において共通しているので、別々の出自を持つものとは思われない。

注目できるのは平城宮編年の碗Cである。この碗は製作技法の粗雑化傾向の中で出てくるもので、平城宮V型式期には、口縁外面1条のヨコナデの下は、そのままユビオサエを残すものとなる。

そのユビオサエは水平に並ぶものが多いが、中には斜めの連続ユビオサエ列も見られ、かつ、口縁がヨコナデで立ち上がり、口縁端部が外反気味に終わる、b種につながる形態的要素が見られるものが多い事、法量が口径14～12cm、器高4cm前後である事などが、後続する時期の粗製土師器碗に共通する。

Ba種に関しては、その外形や、暗文が入る例も少数ある事から、平城宮杯Bと共通点がある事は否定できない。おそらくは、粗製化の傾向を持つ平城宮碗Cの系統の中で、平城宮杯Bを模倣する動きが出て、粗製碗Ba種が出現し、河内のこの地域の粗製土師器碗が、A類・B類を備えて成立し、その独自の典型例として、粗製碗b種が成立すると見て良いだろう。

ついでに触れておけば、平城宮碗Aの系統に関しては、資料を収集していないので不確定ではあるが、高槻市郡家今城遺跡⁴⁾・茨木市総持寺遺跡⁵⁾など、東摂地域の遺跡で、平安時代にも、体部下半にケズリを入れる碗・杯類が存続しているようなので、そちらの地域で受け継がれたのかもしれない。

4. 分布地域の分析

先述したとおり、これらの平安時代粗製土師器碗、特にb種が分布するのは、北は美園遺跡、南は東阪田遺跡を限りとする範囲で、南河内でも南半にはその出土を知らず、北は中河内の南半を含む地域となる。歴史的な地域名称を適用しにくい分布域と言える。

しかし、羽曳野丘陵より西側と、中河内の例は、1遺跡での出土量も少なく、出土する遺構の数も限られている。

圧倒的な量が出土しているのは、やはり、藤井寺市のはさみ山遺跡と北岡遺跡である。どちらも羽曳野丘陵北端近くの東裾に立地しており、この付近が、生産の中心であった可能性は高いと思われる。

その両遺跡に、ある程度まとまった量が出土している葛井寺遺跡・林遺跡を加えても、依然、藤井寺

市の一部の狭い範囲に留まっている。その地域は粗製土師器碗の生産集団が基盤を置き、特に流通経路を開拓しなくても製品が供給できる、自給的な流通圏と考えても良いように思える。

そして、最初に確認した分布域が、商品として供給される商業的な流通圏なのであろう。

まとめてみれば、生産域としては「南河内型」と言えるが、流通圏としてはその域を越えると言える。見方によっては、流通が、古代の郡の枠を超え、独自の地域を形成する新しい動きともとれる。

5. 編年 (図162～165)

ここで、粗製土師器碗の変遷を概観し、その画期により、時期設定を試み、編年案を提示したい。

しかし、基本的に各時期の年代観は、一括資料の共伴遺物により、特に齟齬のない限り既往の編年を使用したい。ゆえに編年は型式編年ではなく、様式編年の一部を抽出したような変則的なものになるが、ご容赦願いたい。なお、文中 () 内の数字は編年表の土器番号である。

この地域の平安時代的土器様式の一部として粗製土師器碗が成立するのは、平安時代初頭、8世紀末から9世紀初頭の事である。そして、a・b種が消滅し、c種も数を減らすのが11世紀中葉、b種は、同時期性の高い一括資料では瓦器と共伴する事なく、11世紀前葉が最後となる。

その期間を大きくはI～IV期の四つに区切り、各々を二つの小期に分けて述べていきたい。

その前に、法量的変化について一言触れておきたい。上田睦は、粗製碗の法量的縮小化傾向を指摘し、その編年案の中で各時期の法量も記載している。

しかし、その傾向は是認できるものの、先述のとおり粗製碗は歪みが激しく、計測位置によって法量もかなり異なるものが多い。特に完形品でないものの実測図では、法量に関しては何も言えないと言っても良い。さらに、粗製であるが故に、例外的な法量を持つものも各時期に少なからず存在する。

つまり、飛鳥・奈良時代の土器様式のように、法量が土器の時期を判断するのに有効な要素であるとは言えない。

I-1期 (8世紀末～9世紀初頭)

Ba種が出現する(19・20)。口径は14～16cm強と大きく、高台も比較的高い。共伴する土器はまだ、律令制的土器様式を保つ。国府遺跡80-5区SD02₆では平城宮杯Bと共伴し、林遺跡93-7区SE201₇のものは(19)、平城宮碗Cと共伴し、ユビオサエが若干不明確ながら、斜めの列を成す。

同じ時期、久宝寺遺跡北SD6001₈ (21・22) や観音寺遺跡井戸E-15₉ (23・24) では、平城宮碗Cの中に、外形が稜をもって屈曲し、ユビオサエ列が見られるなど、Ab種化したものが存在する。それらはまだ規格性が高く、口径も、14cm強と、B類にかなり近い。

I-2期 (9世紀前葉)

Bb種はこの時期から確認できる。Ba種と、法量が共通し、口径14～17cm。Ab種は、屈曲が弱く、口縁が直線的に伸びやや外傾ぎみのものが多いが、定型化する。それとの境界はややあやふやだが、Aa種も見られ、共に口径13～14cm。

以上のものはいずれも斜めの連続ユビオサエ列の見られるものが多く、この調整が定着した事を示している。

この時期にわずかながらAc種が見られる。しかし、それにはユビオサエ列の見られる例はなく、体

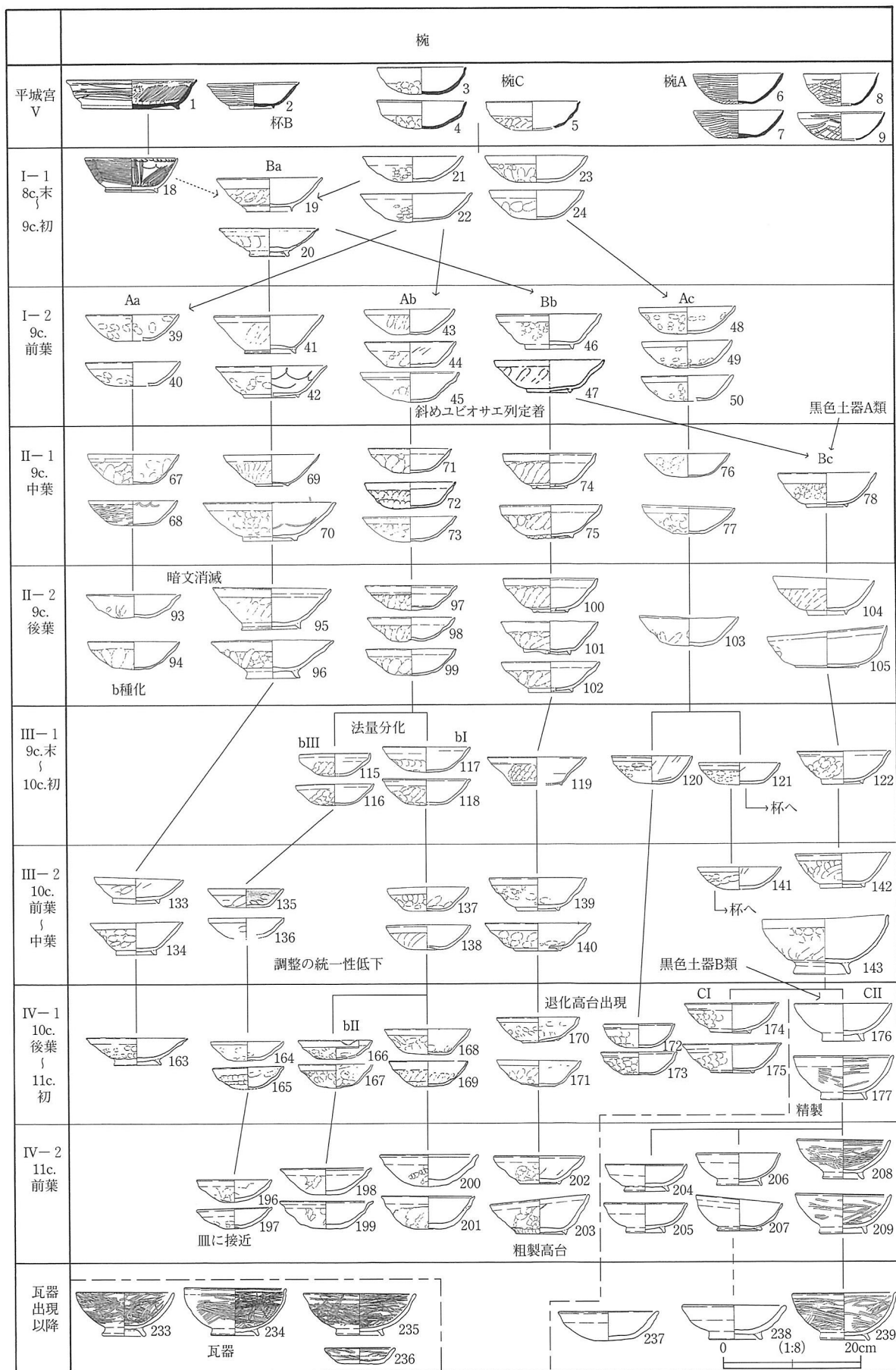


図162 編年表No. 1 碗類

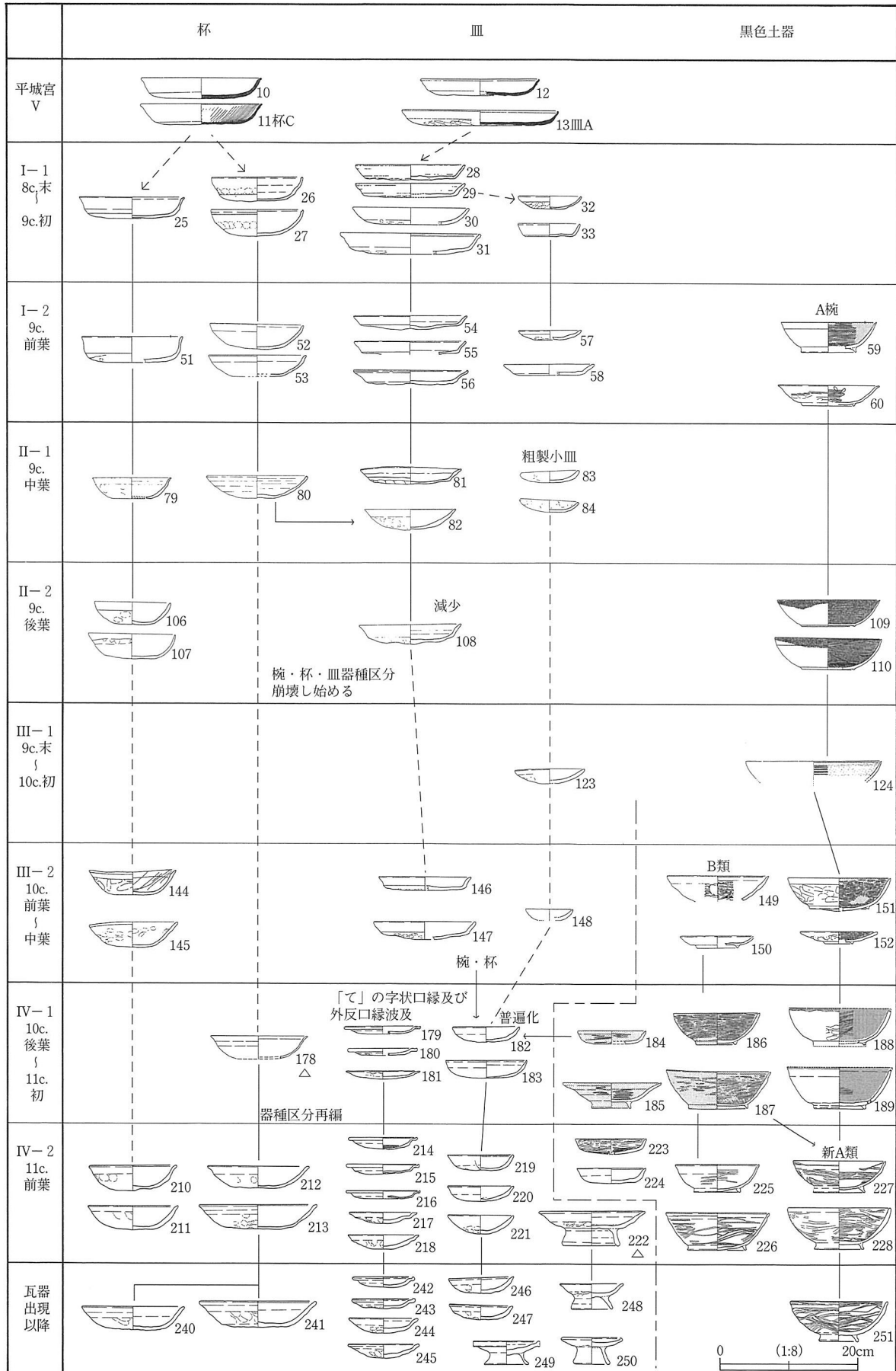


図163 編年表No.2 杯・皿・黒色土器 (△は粗製土師碗と非供伴)

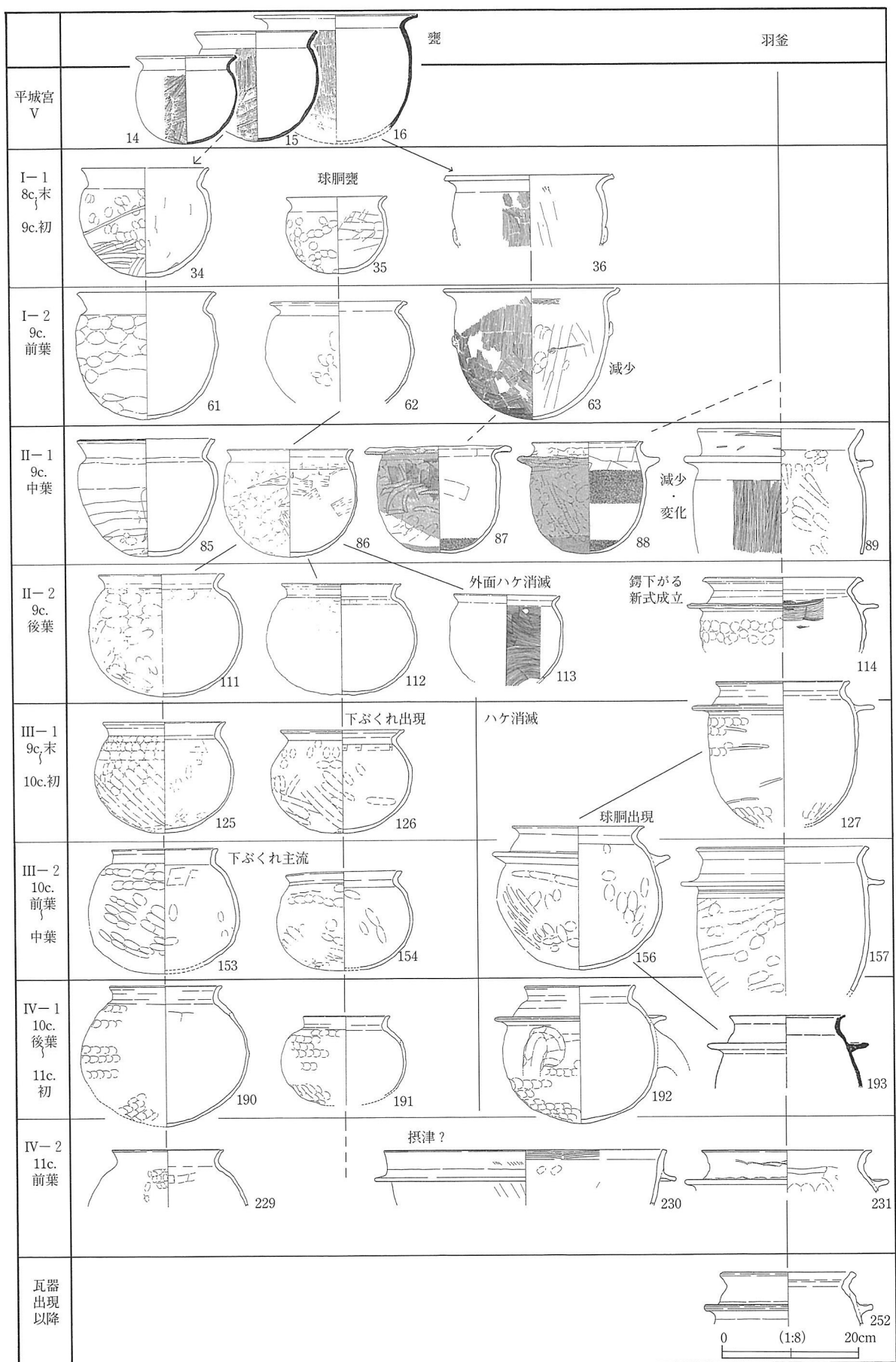
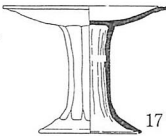
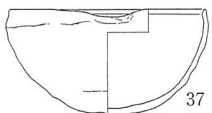
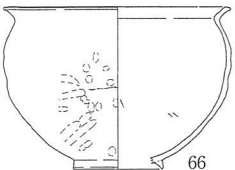
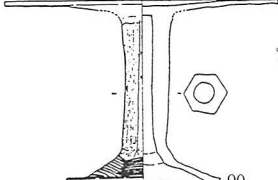
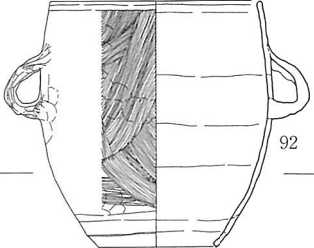
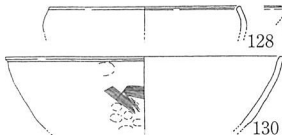
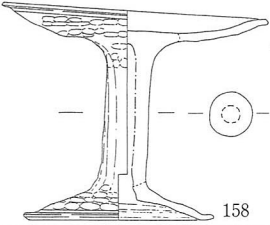
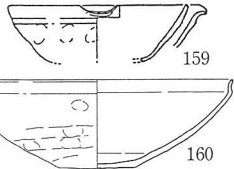
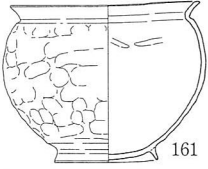


図164 編年表No.3 甕・羽釜

	高杯	鉢	甕
平城宮 V	 17		
I-1 8c.末 9c.初		 37	 38
I-2 9c. 前葉	 64	 65	 66
II-1 9c. 中葉	 90	 91	 92
II-2 9c. 後葉			
III-1 9c.末 10c.初		 128	 129
III-2 10c. 前葉 中葉	 158	 159	 161
IV-1 10c. 後葉 11c. 初		 194	 195
IV-2 11c. 前葉		 232	
瓦器 出現 以降			

0 (1:8) 20cm

図165 編年表No. 4 その他の土師器

部との境が不明確でa種やb種より小さい底部を持つ。これのみが平城宮碗Cの残存型式とも言え、変化は、口縁端部が外反するものが多かったのが、丸く終わるもののみになるていどである。

c種に関しては、平城宮碗C直系のA類と、黒色土器碗と結びつきの強いB類というように、分けて考えたほうが良いのかもしれない。

共伴土器を見ると、この時期は律令的土器様式が存続する最後と言える。しかし既にハケ甕はかなり少なくなり、短い口縁で、口径が胴部最大径と同じかやや小さいものが出現してきている。

河内地域でI期まで存続し、II-1期で激減し、その後消滅するものとして、土師器皿A類の中で、立ち上がりの屈曲が強く、その上に短く外反する口縁を持つ皿がある(29・55・81)。観音寺遺跡F-6₉₎、大堀遺跡(その1)井戸A-3₈₎、久宝寺遺跡南Fトレ第3遺構面a下SD311₈₎、はさみ山遺跡82-5区土器溜まり1・7₁₀₎、93-9区SD11₇₎などで粗製土師器碗との共伴が見られる。

その他にこの時期の粗製土師器碗が見られるものとしては、小阪合遺跡土坑570・落ち込み138₁₁₎、東阪田遺跡1979年度第1区SE-01₁₂₎などがある。

II-1期(9世紀中葉)

出土量が増加し、完全に土師器供膳具の一角に定着する時期である。遺構から出土するにも複数である事が多い。

A類は、a～c種全て、口径が12～14cm強と、粗製碗としては法量的に安定している。B類はようやくBc種が確認され、口径は、13cm以上でばらつきが大きい。特にBa種は口径19cm以上のものなど、大型のものが目立つ。高台は高いものはなくなり、低いものが半数ほどになる。

調整では、全体に斜めユビオサエ列が施されるものが多く、8割ほどを占めると言っても良いと思われる。また、b種はA類を中心に口縁外面のヨコナデが強くなり、屈曲より上の口縁が外反するものが増えてくる。

共伴土器は、律令的土器様式は崩壊し、はさみ山79-38区SE01上層₁₃₎(90)で共伴した土師器高杯が、その名残りであると言える。

土師器甕は、胴部外面全面にハケを施すものはなくなり、球胴形で、口径が胴部最大径より小さいものが増える。

また、この時期は土師器羽釜が非常に少なくなるようである。頸部に鍰が付き寸胴形の古代的羽釜から、鍰より上に肩部が出る中世的羽釜への過渡期とも言える。

粗製碗と共伴する例としては、はさみ山遺跡93-9区SK02₇₎(89)のものが、胴部外面はタテハケで、古い要素を残しながら、鍰が頸部よりやや下がり、その長さも短いところが、過渡期的様相と言える。

また、北岡遺跡80-1区pit 1₁₄₎では、作りの粗い、不定形な羽釜(88)が見られる他、その代用のような、外方へ水平に突き出る鍰のような口縁を持った甕(87)もある。

また、北岡例では、土師器粗製小皿(83・84)が見られ、その孤立的に早い時期の例と思われる。

他には、真福寺遺跡土坑I-2₁₅₎・北岡遺跡A地点SB 1・2₁₆₎の一括資料がこの時期のものと考えられる。

II-2期(9世紀後葉)

b種が完全に主流になり、a・c種は補完的になる。また、少数ながら存在していた暗文を持つものがなくなる。

A類は、口径13～14cm 前後にまとまり、a種は、b種の一類型のようになり、c種は、調整の定型化が見られず、器高も3.5～3 cm と低いものが現れ、杯と区別が付きにくくなる。また、この時期から、b種の中に底部中央を下からへこませるもの(98)が出現し、器高も従来の4 cm 強前後のもの他に、3.5cm 程度のやや低いものが現れる。

B類は、b種が、口径14～15cm 強で収まるのに対し、a・c種は口径15～18cm と、法量的に大きな方へばらつく。高台は、低いものが支配的だが、a種を中心に高いものも見られる。また、わずかだが、高台側面にユビオサエを残すものが見られ、この部分でも粗雑化が進むと言える。

共伴土器としては、土師器羽釜で鏝が頸部より下に付き、胴部外面にユビオサエを残す、新式のもの(114)が登場する。土師器甕はほとんどが球胴形のものになり、口径の縮小化も進行する。ハケは、内面調整として極わずかに見られるていどである。

また、この時期、土師器皿の出土例が減り、実態がつかみにくくなっている。わずかな例からは目立った変化は認められない。平安京域では、碗・杯に先んじて「て」の字口縁化したものが現れるようだが、河内地域では遅れるようである。なお、上田睦はこの時期以降に皿の消滅期を想定しているが、南河内に地域を限定しても、極少数ながら、存続しているようである。

杯もこの時期様相不明だが、粗製碗 Ac 種としたものが、調整に統一性を欠くのは、その中に杯の系統のものが含まれるせいかもしれない。一部は、器高を減らし、皿と接近するようで、そこから見ても碗・杯・皿の器種区分の崩壊がこの時期始まっていると言える。

一括資料としては、はさみ山遺跡82-5 区土器溜まり 5₁₇₎、北岡遺跡 A 地点 SK-2₁₅₎・92-7 区 SK21₁₈₎、葛井寺遺跡87-6 区 SK01・04・10₁₉₎などがある。

III-1 期 (9 世紀末～10 世紀初頭)

A類では、b種が、口径12～13cm 前後と前時期よりやや縮小したもの他に、わずかながら10cm 前後のものが現れ、法量分化を起こすのが、注目される。c種は、口径は12～13cm 前後だが、器高4 cm ほどのものと、3 cm ほどのものに分化する。前の時期で述べたように、後者は杯の系統かもしれないが、外面のユビオサエが水平に並ぶものが多いという調整上の共通点が見られる。a種の動向は不明。

B類では、口径13cm 以上、14cm 前後のものが多く、15cm 以上のものは資料を欠く。黒色土器 A 類が、杯主流の状況から典型的な高台碗が成立して取って代わる状況に連動して、c種も丸みを増し、口径に比して身の深いものになる。高台は、c種のものに、黒色土器の影響か、やや高めのものがあるが、他はかなり矮小化する。しかし、まだ高台の機能を果たしており退化高台とは言えない。

共伴土器では、土師器甕が球胴形の胴部でも最大径が下半にくるものが出始める。また、口径の縮小化もまだ進行している。前の時期に出現した新式の羽釜は数を増やすようだが、まだ胴部は長胴形のみ確認できる。黒色土器 A 類碗が共伴するのは先述したとおりである。土師器皿の動向は不明だが、北岡遺跡93-18区 SK22₇₎の共伴資料に、孤立的に粗製小皿(123)が見られる。

一括資料で、この時期に限定できるものは少ない。上記北岡例の他には、はさみ山遺跡82-3 区土器溜まり 1₁₀₎が、この時期であろう。また、若干古い時期のものも混在するが、北岡遺跡91-3 区 SK01₉₎

もあげられる。

Ⅲ－２期（10世紀前葉～中葉）

全体的には外面の斜めユビオサエ列が施されるものが少なくなり、調整の統一性が崩れる時期である。

A類は、ほとんどb種が占め、法量は前の時期と変わらないが、大型のものはその中でも小さい方の口径12cm前後のものが多くなる。小型のものはまだ、あまり数を増やさない。わずかにあるa・c種は、器高3cm前後の小型のもののみとなり、法量的に皿に近づくとともに、杯との分別が不可能になる。

B類は口径が13～16cmのものがほとんどだが、まれに19cmなど大きなものもある。前の時期もこの法量が実態であるように思える。この時期の最大の変化は、a・c種において、高い高台が復活する事である。b種も、高い高台はないものの、やや大きさを取り戻した高台も見られる。これは前の時期の、黒色土器A類の影響が本格化した事による変化と考えられる。

共伴土器では、土師器甕が、胴部最大径が過半にくるものが多数派となる。土師器羽釜は球胴形のもので出現する。

土師器皿は小阪合遺跡井戸565₁₁)で口径14cm前後のものがまとまって出土しているが、これは、中河内の地域性かも知れず、南河内ではまだかなり少なく、はさみ山遺跡82-5区土器溜まり2₁₀)に1点、北岡遺跡91-3区SK11₃)に少数の破片が見られる程度である。しかし、北岡例に粗製小皿らしき破片があり、これを是認すれば、前の時期からわずかながら、成立している可能性もある。

しかし、この時期には黒色土器皿が見られ、それを補完している。またはさみ山93-5区P1₁₈)で黒色土器B類碗が出現している(149)。

他の器種としては、先の北岡例に、小型の甕に牛角形把手を付けたような把手付片口鍋があり、ユビオサエを多用した粗雑な調整の高杯が見られ、この時期の土器様相の不明瞭な部分の資料となっている。

以上の他の一括資料としては、はさみ山遺跡82-5区土器溜まり6₁₀)、77-4区SK80₂₀)、北岡遺跡91-3区SK10・13₃)、葛井寺遺跡87-11区SK01・03₂₁)などがある。

Ⅳ－１期（10世紀後葉～11世紀初頭）

A類は、b種がほとんどで、その大型のものは、口径12cm前後、器高4cm前後のもの(bⅠ種)と、口径12～11cm、器高3cm前後のもの(bⅡ種)に分化し、小型のものは、口径10～11cm、器高2.5cm前後に縮小する(bⅢ種)。

c種は、杯と分別不可能なものかわずかに残るが、他やa種は、ほとんどが、粗製小皿の中に収束していくようである。

B類では、a種は、口径15cmほどで器高4～3cmと浅いものが見られ、皿に接近する。高台は高いものと低いものがある。b種は、口径は12～14cm前後、器高3～5cmでまとまり、高台は、再び矮小なもののみになり、その極みとして、退化高台が出現する(170・171)。c種は、口径は13～15cmだが、器高が4cm前後で、従来のユビオサエを残し、やや低めの高台を持つものと(cⅠ種)、器高が5～7cmで、全面ナデで、ほとんどユビオサエを残さず、その上にミガキを入れ、高い高台を

持つもの（c II種）に完全に分化する。後者は黒色土器B類碗が土師器化したとも言うべきものだが、ミガキがやや粗雑である。調整が丁寧であるだけでなく、焼成も堅緻で、粗製碗とは言えず、新しく出現した精製碗と言う事ができる。

共伴土器では、土師器甕には顕著な変化は見られない。土師器羽釜では、三足羽釜が出現する。黒色土器碗はB類もよく見られるようになり、小皿も成立する。土師器皿では、定型化した「て」の字状口縁皿が出現し、同時にそれを粗雑化し、口縁端部を丸く折り返さない粗製皿も出現する。それと、黒色土器小皿と器形・法量が共通する粗製小皿も成立する。この小皿を、佐藤隆はAb種の系統とするが、むしろ、他の粗製碗や杯が縮小化した上で、黒色土器小皿の影響を受け、成立したものと思える。

この時期の一括資料としては、小阪合遺跡井戸556・844₁₁₎、久宝寺遺跡北SK6005₈₎、丹上遺跡土坑2-132₂₂₎、太井遺跡ピットJ-8₂₃₎、長原遺跡（その1）C地区SK001₈₎、はさみ山遺跡79-38区SB-04₁₂₎、北岡遺跡93-18区SK01₇₎などがあげられる。

IV-2期（11世紀前葉）

A類では、b種以外は見られなくなる。b I種は、口径12～15cm 前後、器高4～5 cm 前後。b II種は、口径はb I種と同じで器高が4 cm 前後。b III種は前の時期と法量は変わらないが、底部に凹面を作るものは器高3 cm 弱のものが多く、皿に接近する。

B類は、a種は消滅する。b種は、法量的には前の時期と変わらないが、退化高台が、一定数見られ、それ以外の高台では、側面にユビオサエを残す粗製高台も若干見られる。外面調整で、斜めユビオサエ列の見られるものの割合は5割程度である。c種は、精製碗であるc II種のみになるが、その中で、口径は12～13cm と共通するが、器高が4～5 cm のものと、4 cm 以下の浅いものに分かれる。しかし、高台はどちらも高く、断面逆台形のものが多い。また、この時期から、ミガキのないものが多くなり、黒色土器の影響が薄れる。

共伴土器としては、杯で、口径13～12cm 前後・15cm 前後・17～18cm で、器高3 cm ほどの3種が、確認できる。II-2期以来、このての杯は存在しているのだろうが、量的に少ないのか、実態がよく分からない。この時期になって、ようやく少し増加するようである。粗製碗Ac種の消滅は、この杯に形態的に接近しすぎたためと考えられる。

また、皿が量的にかなり増える。この時期には大体器高2.5cm 以下のものは皿として良いようである。「て」の字状口縁皿と、それが粗雑化したような、口縁が外反するが端部は折り返さず、外面にユビオサエの見られる不安定な底部を持った粗製皿が主流になり、それを補完するように、外形・法量が黒色土器小皿と共通する土師器小皿が存在する。口径は10cm 前後。また、この時期には、台付き皿が、成立しているはずだが、今回粗製碗との共伴は認められなかった。

黒色土器では、B類の影響を受けて、外面にミガキを持つ新黒色土器A類が成立するが、これは土師器での碗c II種成立より1段階遅いと言える。

この時期は、長原遺跡（その1）No.26土器溜まり₂₎に、口縁が胴部から直線的に上に伸びる羽釜（230）や、京都府篠栗の捏ね鉢が見られるなど、中河内側では、外部からの日常雑器の搬入が増加しだすようだが、南河内側は、やや遅れるようである。

他にこの時期の一括資料としては、長原遺跡（その1）SK002・023・SE001₈₎、丹上遺跡2-188・掘立柱建物2-7ピット238₂₂₎などがあげられる。

瓦器出現以降

後続する時期の資料として、11世紀後半から12世紀初頭と考えられる長原遺跡（その1）SK022₈の資料をあげたい。

この時期には基本的にそれまでの粗製土師器碗は消滅する。b種のもので瓦器碗と共伴するものはない。精製碗となった Bc II種のみ継続し、その身が浅めのタイプの高台を取ったような土師器碗が新たに成立している。

それらと、杯、小型化傾向の小皿類が、基本的な土師器供膳具のセットとなる。小皿は、極限まで小型化した、「て」の字状口縁系のものが主流だが、その消滅後主流となる、器壁厚く、底部は丸く不安定で、口縁は上外方へ丸くおさまる、粗製小皿も登場している。台付き皿も見られる。

黒色土器碗も残るが、既に高台付き碗の主流は瓦器碗に移行している状況である。

6. 粗製土師器碗の評価

以上の状況を見れば、最初にa種が成立し、時々黒色土器からの影響を強く受けるc種が絡みながら、b種を幹として、粗製土師器碗という一つの形式が成立し、一定の時期存続したという事ができる。

その期間は、奈良時代以来の律令的土器様式が崩壊してから、瓦器碗が登場して中世的土器様式が成立するまでの間である。

その中でこれらの碗は、I－2期で定型化し、II－1期で土師器の中でのあり方においても安定し、III－1期で法量分化を起こすなど、独自の発展を見せる。

しかし、一方では終始一貫して調整の粗雑化と、法量の縮小化は進行しており、また、黒色土器の影響も受け続け、IV期において形式の崩壊の様相を見せて消滅していく。

これは杯・碗・皿がその区別を失っていく、転換期の粗製土器としての限界性とも言うべきものであろう。この時期、精製土器として主導的な位置にあったのはやはり黒色土器碗であり、粗製土師器碗は結局それを量的に補完するものにすぎなかったと言える。

そのため、土師器杯・皿類が瓦器登場に先んじて再編の様相を見せるIV期に、これらはその役目を終えていくのである。

だが、口縁部外面の強いヨコナデ、斜めユビオサエ列、製作時の板状粘土の使用など、技法的に、後続する瓦器と共通する要素が見られるのはどう考えるべきであろうか。

瓦器との共伴例がなく、生産地も離れている事から直接的な系譜は考えがたい。やはり、瓦器は黒色土器とのつながりが強いと考えられる。精製土器である黒色土器で、丁寧な調整の下に埋没している製作技法が、粗製土師器碗の器表に現れていると考えるのが妥当のように思われるがどうであろうか。

また、今回のこの論で、地域性の問題も浮かび上がってきたと言える。この土師器碗自体がその独自性を示すものではあるが、共伴する土器の様相を見ても、「て」の字状口縁皿の出現が京都より遅れる事や皿類の極端な減少などの他、独自の羽釜の創出や、土師器甕の無ハケ化の早さなどが抽出できる。

これは、この時期の土器様相が、京都など中心的地域の様相を以って広い範囲の状況を理解できるものではない事を示している。

その原因は、これらの粗製土師器碗の狭い流通範囲に現れている。

奈良時代には、土器の商品的流通の発展は見られても、頂点に律令的、公的消費に供給される土器様式が存在し、各地域の土器生産もそれをモデルに行われていた。

それが、平安時代に入ると、頂点の京都で消費される土器の供給地は、京都周辺に限られるようになり、各地域の土器生産はモデルを失い、各々独自に日常消費の土器を生産するようになったのではないだろうか。

そして、古代的生産を引き継いだ須恵器系や、黒色土器の生産地は、その技術的高さと、生産体制の整備された状況とによって、ある程度の流通範囲を確保したが、一般的な日常消費をまかなえるほどの生産量を確保するには至らなかったと思える。

それに対し地方的な土師器生産は、広い流通範囲を喪失し、狭い範囲での消費に答えるため、実用性と生産性のみを重視して製作過程を簡略化し、独自の生産を行うようになった。

その動向の理由は明らかではないが、もしかすると土師器生産は元々小規模分散的な形態をとっていて、広範囲への流通には公的機関の関与が必要だったのかも知れない。

日常雑器としての碗が、広域流通に耐えうる質と、生産量を得るのは、瓦器の登場を待たなければならなかったと言える。

以上、平安時代前半期河内南半部の粗製土師器碗の動向を見ていく中で、過渡期の土器の生産・流通の様相や、土器の変化傾向に関する興味深い類例を得られた。

その独自の流通範囲が、歴史的にいかなる地域としてとらえられるかは今後の課題だが、今まで注目するものの少なかった土器の様相が解明できる一助となれば幸いである。

編年表掲載土器出土遺跡・遺構一覧

平城宮V型式期

平城京左京八条三坊 SE200 (1・3～5・8・9・12・13)、平城宮 SK2113 (2・6・7・10・11・14～17)、

I-1期

観音寺井戸 E-15 (18・23・24・30・31・34～38)、林93-7 SE201 (19・20・25～27・32・33)、久宝寺北 SD6001 (21・22)、国府80-5 SD02 (28・29)、

I-2期

小阪合土坑570 (39・40・42・57)、はさみ山93-9 SD11 (41・43・54～56)、長原その1 旧No35トレンチ北壁土坑 (44・60・66)、東阪田79-1 SE01 (45・52・53・62・65)、久宝寺南Fトレ SD311 (46)、はさみ山82-5 土器溜まり1 (47)、小阪合落ち込み138 (48～51・59・64)、観音寺F 6 (57・61・63)、

II-1期

北岡80-1 Pit 1 (67・68・70・73・77・79・80・82～84・86～88・91)、真福寺土坑 I-2 (71・81・85・92)、北岡 A SB 1・2 (71・81・85・92)、はさみ山93-9 SK02 (72・74・75・78・89・90)、

II-2期

第Ⅶ章 考 察

葛井寺87-6 SK01 (93・103～107・109・110)、北岡A SK-2 (94・96・99～102・113・114)、北岡92-7 SK21 (95・97・98・108・111・112)、

Ⅲ-1期

北岡93-18SK22 (115～119・122・123・127)、北岡91-3 SK01 (120・121・124～132)、

Ⅲ-2期

北岡91-3 SK11 (133～138・141・142・148・153～156・158・162)、小阪合井戸565 (139・140・146・147・151・152)、はさみ山82-5 土器溜まり6 (143・160・161)、北岡91-3 SK10 (144)、北岡91-3 SK13 (145)、はさみ山93-5 P1 (149・150)、はさみ山82-5 土器溜まり2 (157・159)、

Ⅳ-1期

はさみ山79-38SB04 (163・165・169)、小阪合ピット9 (164)、小阪合井戸844 (166・167・170・186・187)、小阪合井戸566 (168)、小阪合ピット59 (171)、北岡93-18SK01 (172～175・190～194)、長原その1 C SK001 (176・177・179～181・195)、長原その1 C SK460 (178)、久宝寺北 SK6005 (182・183)、長原V南Ⅱ区 SP382 (184～185)、丹上土坑2-132 (188・189)、

Ⅳ-2期

長原その1 No.26 土器溜まり (196・197・201～207・217・218・225～231)、長原その1 SK023 (198～200・208～213・232)、長原その1 SK001 (214・215・219～221)、長原その1 旧3層 (222)、

瓦器出現以降

長原その1 SK022 (233～252)、

引用文献

- 1) 「南河内遺跡群発掘調査概要Ⅱ」大阪府教育委員会 1989年
- 2) 「長原遺跡発掘調査報告Ⅴ」大阪市文化財協会 1992年
- 3) 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅷ」藤井寺市教育委員会 1993年
- 4) 「高槻市史第6巻考古編」高槻市史編纂委員会 1973年
- 5) 「総持寺遺跡」大阪府文化財調査研究センター 1998年
- 6) 「国府遺跡発掘調査概要ⅩⅠ」大阪府教育委員会 1981年
- 7) 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅹ」藤井寺市教育委員会 1995年
- 8) 「河内平野遺跡群の動態Ⅷ」大阪府文化財調査研究センター 2000年
- 9) 「観音寺遺跡」大阪府文化財調査研究センター 1998年
- 10) 「昭和57年度はさみ山遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 1983年
- 11) 「小阪合遺跡」大阪府文化財調査研究センター 2000年
- 12) 「東阪田遺跡」大阪府教育委員会 1980年
- 13) 「昭和54年度はさみ山遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 1980年
- 14) 「林遺跡発掘調査概要Ⅲ」大阪府教育委員会 1981年
- 15) 「真福寺遺跡」大阪府文化財調査研究センター 1997年
- 16) 「林遺跡発掘調査概要Ⅱ」大阪府教育委員会 1980年
- 17) 「林遺跡発掘調査概要Ⅴ」大阪府教育委員会 1983年
- 18) 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅸ」藤井寺市教育委員会 1994年
- 19) 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅲ」藤井寺市教育委員会 1988年
- 20) 「挟山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 1978年
- 21) 「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅳ」藤井寺市教育委員会 1989年
- 22) 「丹上遺跡」大阪府文化財調査研究センター 1998年
- 23) 「太井遺跡」大阪府文化財調査研究センター 1996年